

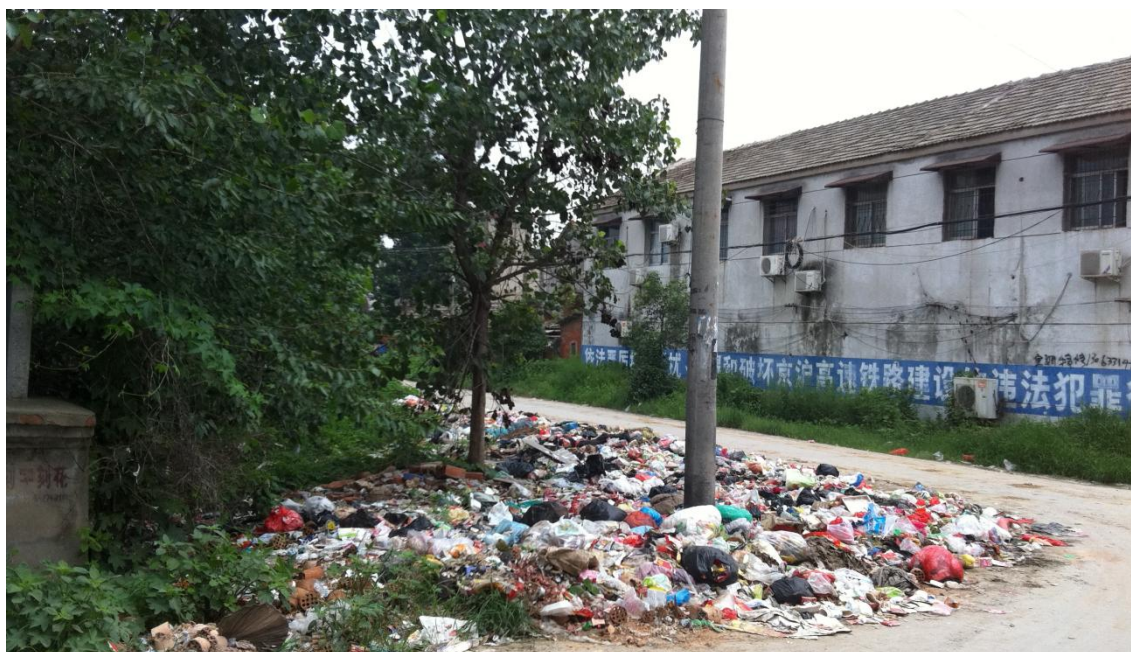
## 中国のゴミ問題

2011.8.12

香港 花木

7月11日付け経済観察報によれば、北京市郊外には都市を取り巻く六重の環状道路の外にもう1つの環状帯があるという。その「第七環状」はゴミ捨て場の環状帯だそう。都市建設のために土砂を採取した跡地をそのまま請負会社に転売し、その穴の中にゴミを放り込んで、最後に簡単に土をかぶせる。ただしなんでも埋めてしまうわけではなく、ゴミの中から木材、金属、布、電子部品等をより分けることを生業にする者が住み着いているという。経済観察報の記事は、こうした「第七環状」をテーマとしている写真家王久良さんを取り上げたものだったが、王さんが写真を撮ろうとするとこうしたゴミ分別生業者から犬をけしかけられたり抜き身の刃物を振り上げて追いかけられたりしたという。近代的な北京 CBD の周囲には、まるで戦後の焼け跡のような町がまだ残っているのである。

中国ではゴミを焼却することはあまりなく、ほとんどが捨てっぱなしである。環境保護局の予測によれば、年間のゴミ発生量は1.5億トンと世界の約3分の1を占めるが、焼却されるのはその1割にも満たないという。首都北京ですら上記のありさまなのだから、地方都市や田舎では、一般に、ゴミというのは一か所に集めて置いておくものであり、その後運搬したり処理したりするということは全くなく、そのまま放置されるのが一般であるように見受けられる。

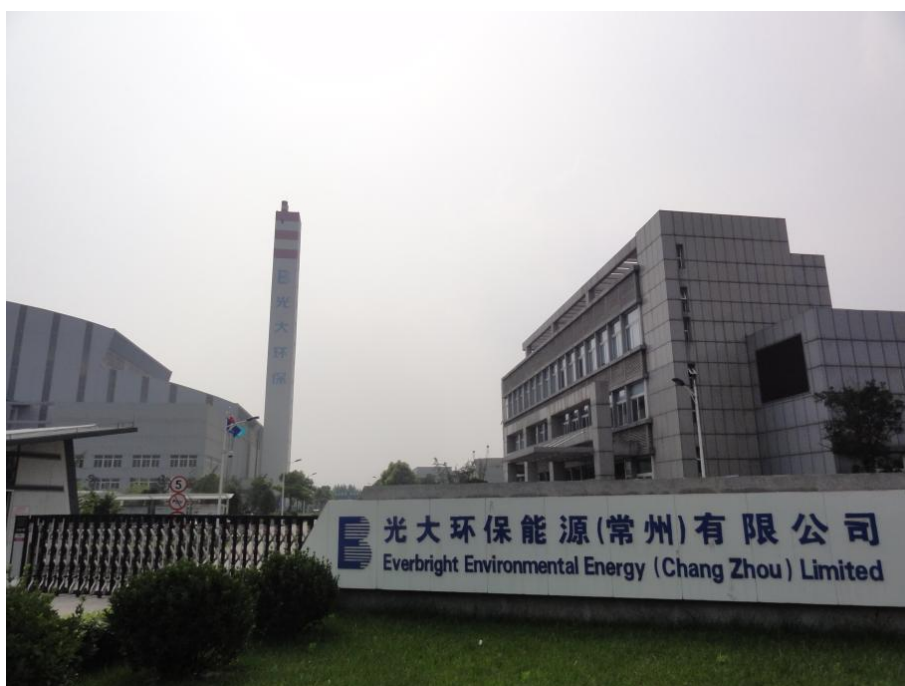


↑ 安徽省汪圩村のゴミ置き場。置いてあるだけで運搬しないので腐敗臭がひどい。

こうしたゴミ問題の解決は、第 12 次五カ年計画の中でも取り上げられており、第 23 章「全力で循環経済を発展させる」という節立ての下、「健全なゴミ分別回収制度を確立し、密閉したゴミ輸送と集中処理システムを整えるとともに、食品廃棄物等ゴミ資源の利用と無害化を進める」と記載されている。具体的なゴミ処理方法についても、上述のように、現状では埋め立てによるものが圧倒的だが、中国の土地利用動向を見ると、農地保護はますます厳格になってきており、都市周辺の土地は開発用地としてますます貴重になってきているため、今後は、埋め立てから焼却に向けて大きく転換していくことが急務になっていくものと思われる。

ただし、ゴミ焼却施設を都市の中に建設することは、中国でも決して簡単ではない。広東省ではゴミ焼却施設の建設を巡って昨年仏山市や東莞市で地元周辺住民と政府との間で激しい対立があった。こうした動きは今後住民意識の高まりに応じてますます強くなっていくことが見込まれることから、今後建設されるゴミ焼却施設については、燃焼排気ガスのクリーン化・無臭化が必要になることは間違いないだろう。同時に、ゴミ焼却施設を「迷惑施設」から「利益をもたらす施設」に転換するため、日本で行われているような焼却熱の有効利用もこれから求められていくものと思われる。

筆者の調べた限り、中国ではゴミ焼却余熱を利用して温水プールを営業したり植物公園を開設したりしている例は見当たらなかった。現在既に進んでいるのはゴミ発電で、これは既にいくつかの実績がある。7 月末に江蘇省常州市のゴミ発電所を訪れたが、ここは、市街地の外れとはいえ周辺に多くのマンションが立ち並ぶ区域に設けられていた。説明によれば、このゴミ発電所は処理能力 800 トン／日で総建設費は約 4.1 億元、年間発電能力は 8600 万 kWh で 2008 年に運用を開始したという。実際、周りを歩き回ってみても特に異臭はなく、生活の中にうまく溶け込んでいるように思われた。



← 江蘇省常州市のゴミ発電施設

ゴミ発電は、自治体にとっては単なるゴミ焼却施設よりメリットがあると思われるが、同時に搬入されるゴミの分別等、管理には手間がかかるはずだ。また、更に重要なのは、発電した電力の売却価格で、これは聞いた限りだと基本的には1kWh当たり0.3元程度（4円/kWh）と安いので、地元自治体の補助を受けることが必要になる。（補助を受けた後で、0.6～0.7元/kWh程度というのが一般的であり、これで採算に乗せることが必要である。）報道では、我が国大手プラントメーカー等も最近重慶市等でゴミ発電プラントの売り込みに成功しているようであり、今後その導入は更に進むものと思われるが、中国における周辺住民対応がますます重要になりつつある現状を考えると、発電以外に周辺住民に直接メリットの及ぶ熱利用についても、我が国での実績を事例として豊富な提案型の営業を行うことにより差別化できる余地もあるのではないだろうか。「民生重視」のプロジェクトは、地元政府にとっても政績アピールの事例として格好のPR材料にもなることから、今後、大きな商機があるように思われた。



↑ 所内の緑化も進んでいるが、周辺住民には未開放である。

(以上)

Disclaimer: 本資料中の数字は注意してチェックしていますが正確さを保証するものではありません。

文章中意見にかかる部分は個人的見解でありいかなる組織の意見でもありません。